

 労協連だより

古村 伸宏

今年も夏の甲子園の季節が始まる。最大の注目は、熊本県から初めて代表の座を手にした専修大学玉名高校。センター事業団の大牟田事業所に、たくさんの若者を送り出し続けている学校だ。私も10年近く前、学校がヘルパー講座を企画するという話でお邪魔した。その時、センター事業団との関係づくりのキーパーソンとなった加藤先生にはじめてお会いした。センター事業団の集会参加や、この発見誌への寄稿も頂いている、元高校球児の先生であり、進路指導の任に当たられている。大牟田事業所へは10名前後の若者が就職し、そこから全国へと旅立った者たちもいる。協同労働のテレビ報道が相次いだ際も、取り上げられた事業所である。その学校が甲子園にやってくる。なんだか母校が出場したときのような高揚感である。こんな地域での関係が、ていねいに見つめ直すと全国にたくさんある。このつながりが、新しい社会創造に協同労働運動が向かうに当たって、どんな意味を持つことになるのか。この観点が呼び起こされた、出来事だ。

総会・総代会を受け、この夏から秋の最大の焦点は、「脱原発」「原発全廃」の新しい社会に向かう上で、市民と共に「地域戦略」を描く取組みだ。その焦点は、「FEC」を自給するコミュニティづくりと、本物の市民が創造する公共づくりの2点である。

この取組みをどこからどのように始めるのか、を巡って、センター事業団の本部長合宿と、地域労協会議が立て続けに開催された。どうやらポイントは、「地域調査」と「新自治体行動」のようだ。また新しい挑戦と新たな出会いが、この中から生まれるだろう。

法制化運動も、民主党議連が再起動し、お盆明けから新たな展開が予想される。笹森さんが亡くなられ、偉大なリーダーを失った喪失感と、法制化の先行きの不透明感が高まっていたが、島村さんを始めとする事務局の地道な執念が、少しずつ事態をエンディングへ押し上げている。新生日本に無くてはならない法律、国際協同組合年を象徴する法制化として、再び頂を目指した挑戦が始まる。

その国際協同組合年に先駆け、宮城県大崎市において、みやぎ生協・JA緑の・センター事業団の3協同組合によるBDF事業が始まった。協同組合が地域や社会的課題に共同して取り組む、新しいネットワーク型事業であり、協同組合が公共を創造する取組みの始まりである。この中から、協同組合が中心となったコミュニティづくりと、その具体的テーマである環境から食や農、そしてケアの世界へと、北の地から壮大な挑戦が始まる。乞うご期待。